



令和8年度「全国学力・学習状況調査」の調査結果について

令和8年9月
江別市教育委員会

I 調査の概要

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらにそのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査の対象学年及び調査を実施した学校・児童生徒数

区 分	対象学年	実施学校数（校）	児童生徒数（人）
小学校	第6学年	17	896
中学校	第3学年	8	841
合 計		25	1737

3 調査の内容

(1)教科に関する調査 (小学校は国語・算数) (中学校は国語・数学・英語)	・出題範囲は調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。 ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等 ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等 ・調査問題では、上記①と②を一体的に問う。 ・出題形式について、記述式の問題を一定割合で出題する。 ・英語「話すこと」に関する問題の解答は、原則として口述式とする。 ・英語の出題には、次回以降も同じ問題を使用して、学力の状況や変化を正確に把握することを主目的とする非公開問題が含まれる。 ※国語、算数・数学は冊子で実施する ※中学校英語は、文部科学省 CBT システム (MEXCBT) によるオンライン方式 (CBT: Computer Based Testing) で実施する。
(2)質問調査	・児童生徒に対する質問調査～学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 (例) 学習に対する興味・関心、授業内容の理解度、基本的生活習慣等、家庭学習の状況など ※児童生徒が活用する ICT 端末等を用いて CBT で実施する。 ・学校に対する質問調査～指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 (例) 授業の改善に関する取組、指導方法の工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況 など ※オンラインによる回答方式 (Web システム) で実施する。

4 調査方式

悉皆調査 (対象は小学校6年生、中学校3年生)

5 調査期日

◎小学校	国語・算数	令和8年4月23日(木)
	児童質問調査	令和8年4月24日(金)～5月8日(金)で学校指定日にオンライン方式 (CBT) で実施
◎中学校	国語・数学	令和8年4月23日(木)

英語（3 技能）「聞くこと・読むこと・書くこと」・生徒質問調査

令和 8 年 4 月 20 日（月）～4 月 23 日（木）で学校指定日に
オンライン方式（CBT）で実施

英語「話すこと」

令和 8 年 4 月 28 日（火）～5 月 29 日（金）で学校指定日に
オンライン方式（CBT）で実施

◎学校質問調査

令和 8 年 4 月 1 日（水）～4 月 17 日（金）で学校が希望する日に
オンライン方式(Web システム) で実施

6 調査結果の解釈等に関する留意事項

本調査の結果については、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面であることなどを踏まえる必要がある。

II 結果の概要

1 教科に関する結果の概要

- 小学校 6 年生は、国語は全国平均を上回り、算数は全国平均を下回りました。全道平均は 2 教科とも上回りました。
- 中学校 3 年生は、国語・数学は全国平均を上回りましたが、英語（4 技能）は全国平均を下回りました。全道平均は全ての教科で上回りました。
- 評価の観点の「思考・判断・表現」と問題形式の「記述式」で、小学校国語、中学校国語・数学で全国平均を上回りました。要因として、主体的に考えて表現するなどの学習活動の充実を推進する授業づくりが多くの学校で見られていることがあげられます。また、授業を含めた教育活動全体で書く活動を重視している学校も多く見られることもあげられます。

2 質問調査に関する結果の概要

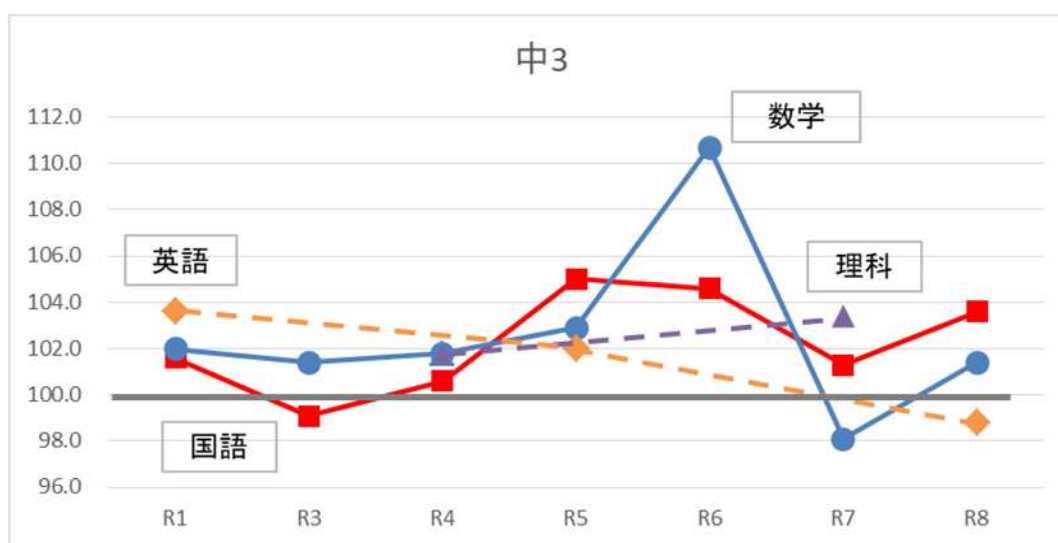
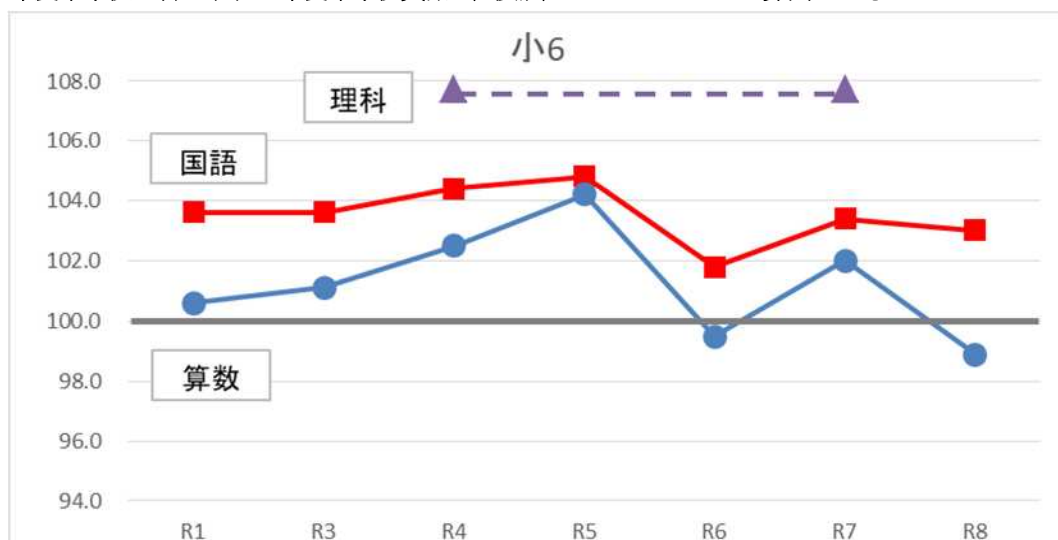
- 「授業中の私語が少なく、落ち着いていると思う」割合は、小学校が全国平均を大きく上回っており 4 年連続 100%でしたが、中学校は 87.5%でした。江別市の小学校は大変落ち着いた状態にあると言えます。
- 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」割合は、小学校、中学校ともに全国平均を上回っていますが、100%には届いていません。各学校で行われているいじめをなくす取組はもちろんのこと、道徳教育や人権教育の取組、自己有用感を醸成する取組等、根気強く継続して行うことで、割合を高めていく必要があります。また、否定的な児童生徒の理由を確かめるなど、個々の指導にも目を向ける必要があります。
- 「自分にはよいところがあると思う」割合は、小学校は全国平均を上回り、中学校は全国平均と同等でした。「先生はあなたの良いところを認めてくれていると思う」割合は、小学校では全国平均を上回り、中学校では全国平均と同等でした。各学校で行われている自己肯定感を育む取組が充実し、結果に表れてきました。
- 「児童生徒が課題の解決のために自分で考え、自分で取り組んでいる」割合は小学校で 4.6 ポイント、中学校で 1.9 ポイント全国平均を上回りました。また、「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てを工夫して発表している」割合は小学校では全国平均と同等でしたが、中学校は全国平均を 1.1 ポイント下回りました。「他者と情報交換して話し合ったり異なる視点から考えたり協力し合ったりできるように学習課題や活動を工夫した」割合は小中学校とも 2 年連続で 100%でした。全ての小中学校で子どもが主役の授業づくりを推進しています。
- 「I C T 機器を活用した授業を週 3 回以上行った」割合は、学校質問調査では 100%、児童生徒質問調査では小学校で 74.6%、中学校で 89.7%と全国平均を上回り、I C T 機器を活用した授業が積極的に行われています。また、文章やプレゼンテーションを作成したり、情報を整理し資料を作成したりするなど、児童生徒がタブレット端末を多くの場面で活用し、学習用具として十分に活用されています。

○「前年度までに、近隣等の中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を行った」割合は、小学校、中学校ともに 100%で、全国平均を大きく上回っています。江別市の小中一貫教育は各中学校区で完全に定着し、子どもたちの自己肯定感につながる取組となっています。

○「コミュニティ・スクールや地域学校協働活動等の取組は、学校教育活動の充実や学校課題の解決だけではなく、地域及び家庭の課題解決や地域活動の担い手育成に貢献していた」割合、「学校と地域や保護者との相互理解が深まっている」割合は小中学校ともに 100%で全国平均を上回っています。学校から見ると地域や保護者との理解が深まっていると言えますが、この取組を活用して学校の運営や教育活動に関し、意見表明できる取組を行ったのは小学校で 76.4%と全国平均を 30 ポイント上回りましたが、中学校では 25%で全国平均を 24 ポイント下回りました。小中学校で大きな違いがあることから、中学校区で情報交換するなど、まずは活用の仕方を共有することからはじめ、実践につなげることが望まれます。

3 令和元年度からの平均正答率の経年変化（全国平均を 100 と見たとき）

※令和 7 年度中学校理科と令和 8 年度中学校英語（4 技能）は IRT スコアから算出したもの



<令和元年度からの教科別経年変化>

○小学校 6 年も中学校 3 年も、全ての教科が全国平均を下回った年はありません。

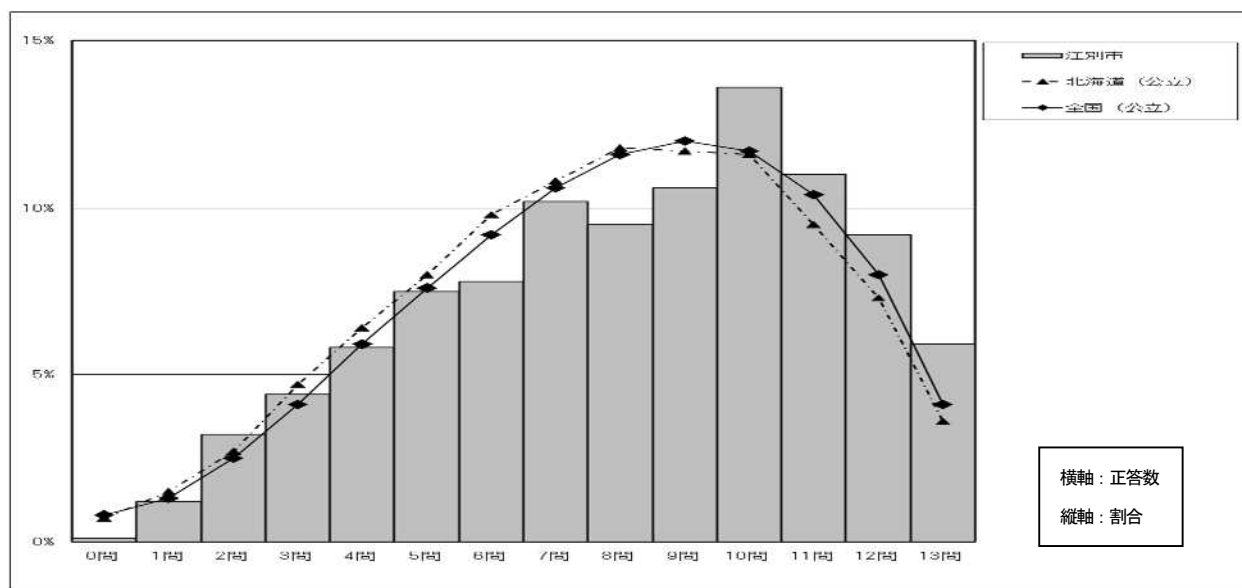
○小学校国語は、一度も全国平均を下回っていません。

○小中学校理科は、令和 4 年度と 7 年度実施ですが、2 年とも全国平均を上回りました。

Ⅲ 各教科の結果

1 小学校 「国語」

＜正答数分布グラフ＞（横軸：正答数 縦軸：割合）



	児童数	平均正答数	平均正答率 (%)
江別市	896	8.2 / 13	62.7
北海道（公立）	33,169	7.8 / 13	59.6
全国（公立）	922,411	7.9 / 13	60.9

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				江別市	北海道（公立）	全国（公立）
全体			13	62.7	59.6	60.9
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	4	70.0	65.9	66.8
		(2) 情報の扱い方に関する事項	2	54.2	51.0	52.3
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	0			
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	66.1	64.4	65.8
		B 書くこと	2	47.2	43.2	45.7
		C 読むこと	2	67.0	65.0	65.9
評価の観点		知識・技能	6	64.7	60.9	62.0
		思考・判断・表現	7	61.0	58.5	60.1
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	9	62.7	60.4	61.9
		短答式	2	67.6	62.3	62.6
		記述式	2	57.9	53.4	54.9

＜結果＞

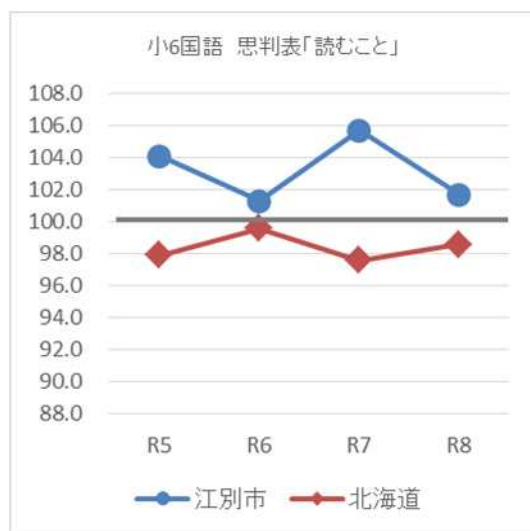
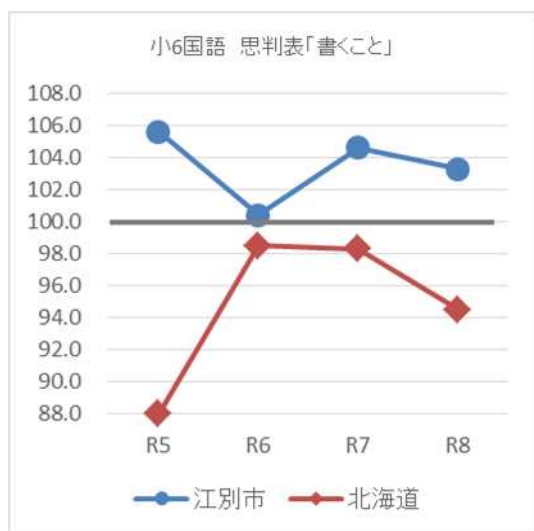
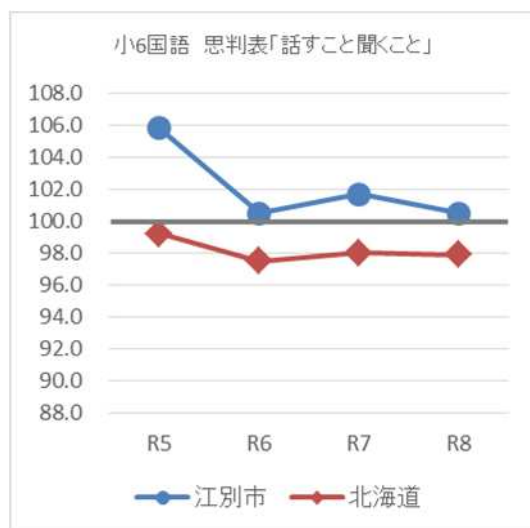
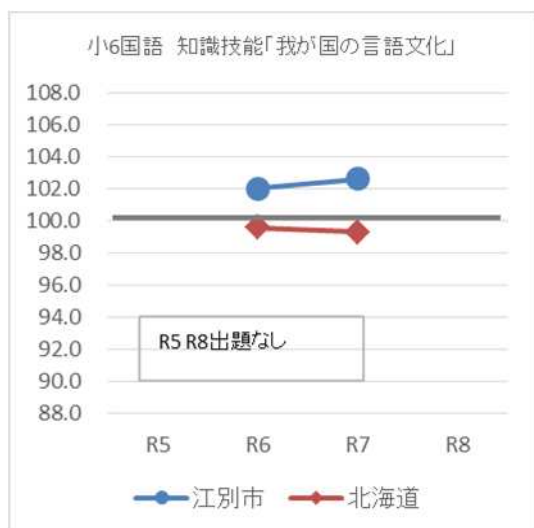
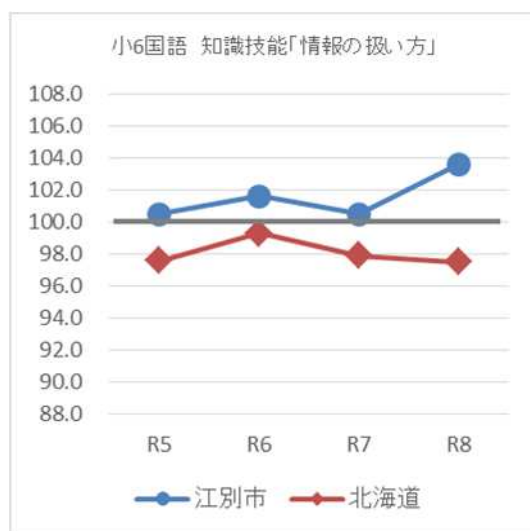
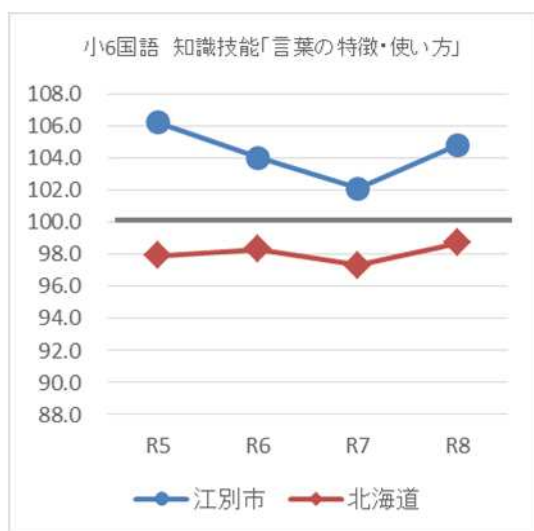
- 平均正答率は62.7%で全国平均を1.8ポイント、全道平均を3.1ポイント上回っています。
- 学習指導要領の内容別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、全ての項目で全国・全道平均を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考慮することができる」

筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考慮するためには、それぞれの段落の内容としてどのようなことを書けばよいのかを考え、読み手が理解しやすいように書き方を工夫することが大切です。

【全国平均を100と見たときの領域別経年変化（小学校 国語）】

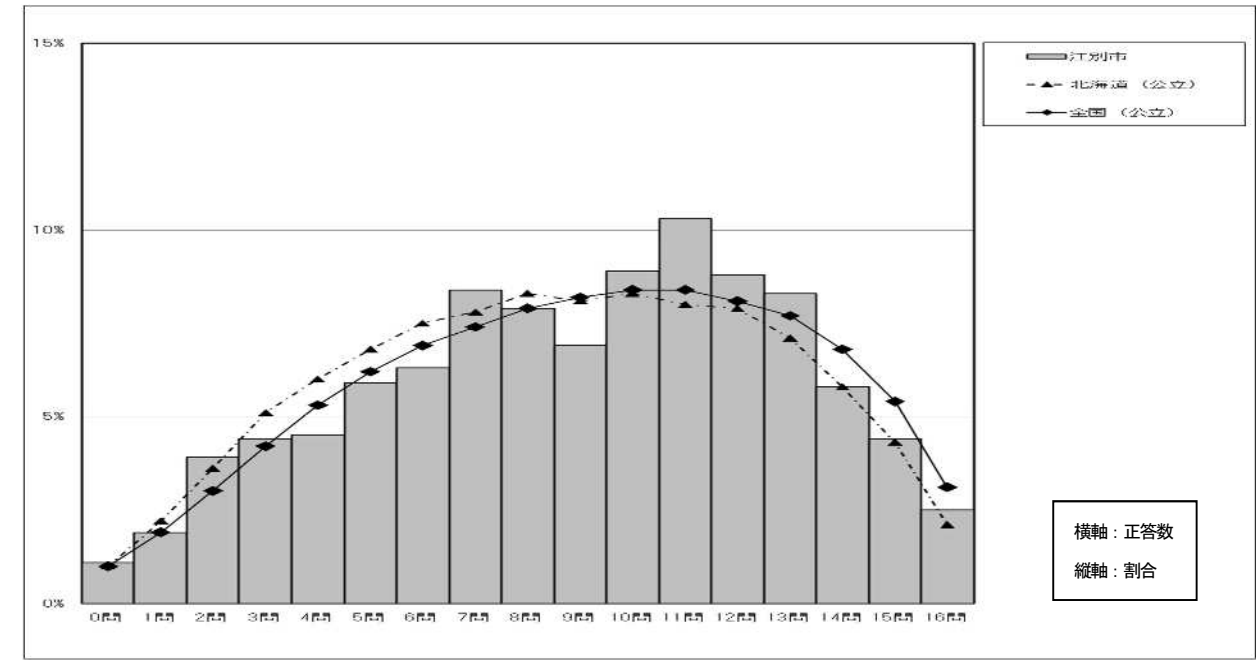


＜令和5年度からの領域別経年変化＞

- 知識・技能、思考・判断・表現の全ての領域において令和5年度から4年間、全国平均を上回っています。
- 「書くこと」領域に各校が力を入れていることから令和6年度以外は高い水準を維持しています。

2 小学校 「算数」

＜正答数分布グラフ＞（横軸：正答数 縦軸：割合）



	児童数	平均正答数	平均正答率 (%)
江別市	896	8.9 / 16	55.8
北海道（公立）	33,171	8.6 / 16	53.6
全国（公立）	922,778	9.0 / 16	56.4

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			江別市	北海道（公立）	全国（公立）
全体		16	55.8	53.6	56.4
学習指導要領の領域	A 数と計算	8	60.7	58.2	61.1
	B 図形	4	53.8	51.8	55.3
	C 測定	1	78.9	76.4	78.1
	C 変化と関係	3	39.2	38.1	41.1
	D データの活用	4	48.1	45.6	48.6
評価の観点	知識・技能	12	59.4	57.4	60.1
	思考・判断・表現	4	45.1	42.5	45.4
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	5	56.0	54.4	56.0
	短答式	8	58.5	56.6	59.7
	記述式	3	48.3	44.5	48.5

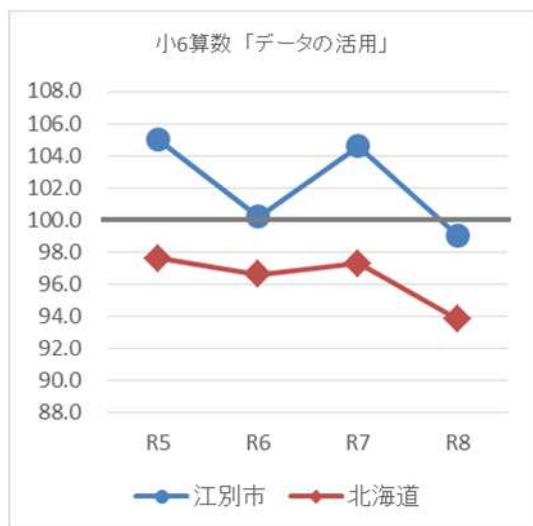
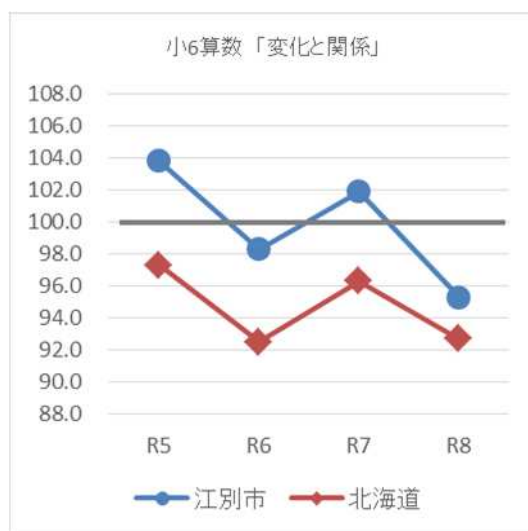
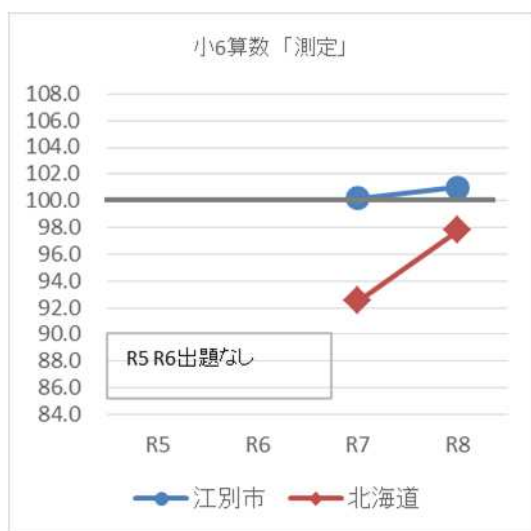
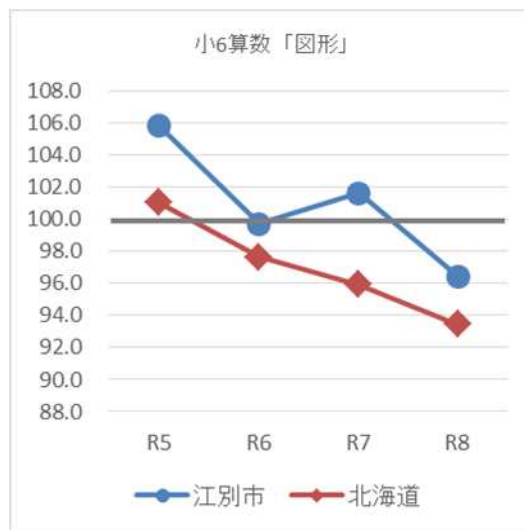
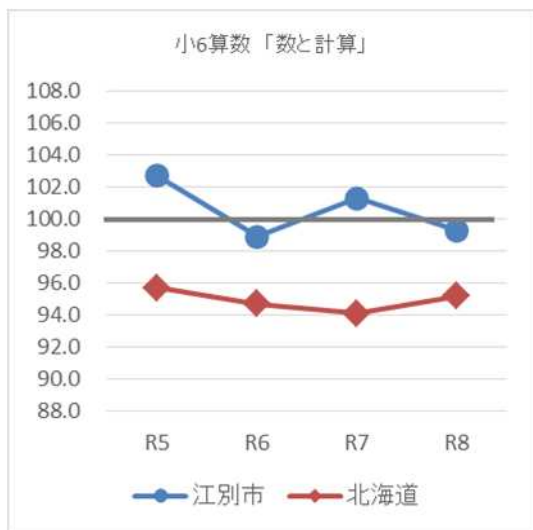
＜結果＞

- 平均正答率は55.8%で、全国平均を0.6ポイント下回り、全道平均を2.2ポイント上回っています。
- 学習指導要領の領域別平均正答率は「測定」以外の項目で全国平均を下回り、評価の観点別平均正答率は、2つの項目「知識・技能」「思考・判断・表現」とも全国平均を下回っていますが、全ての項目で全道平均を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「体積の意味について理解している」
立方体や直方体の体積は、長さや面積などと同様に単位の大きさを決めるとその幾つ分として数値化できることを理解できるようにすることが大切です。
- 「日常生活の問題を解決するために、図形を構成する要素に着目して直方体の三つの辺の長さを捉え、示された条件を基に、調べたい数量の求め方を数や言葉を用いて記述できる」
問題解決に必要な直方体を構成する要素を見だし、それを活用できるようにすることが大切です。
- 「百分率で表された割合と比較量から、基準量を求めることができる」
問題場面から、基準量、比較量、割合の関係を捉えることができるようにすることが大切です。

【全国平均を100と見たときの領域別経年変化（小学校 算数）】



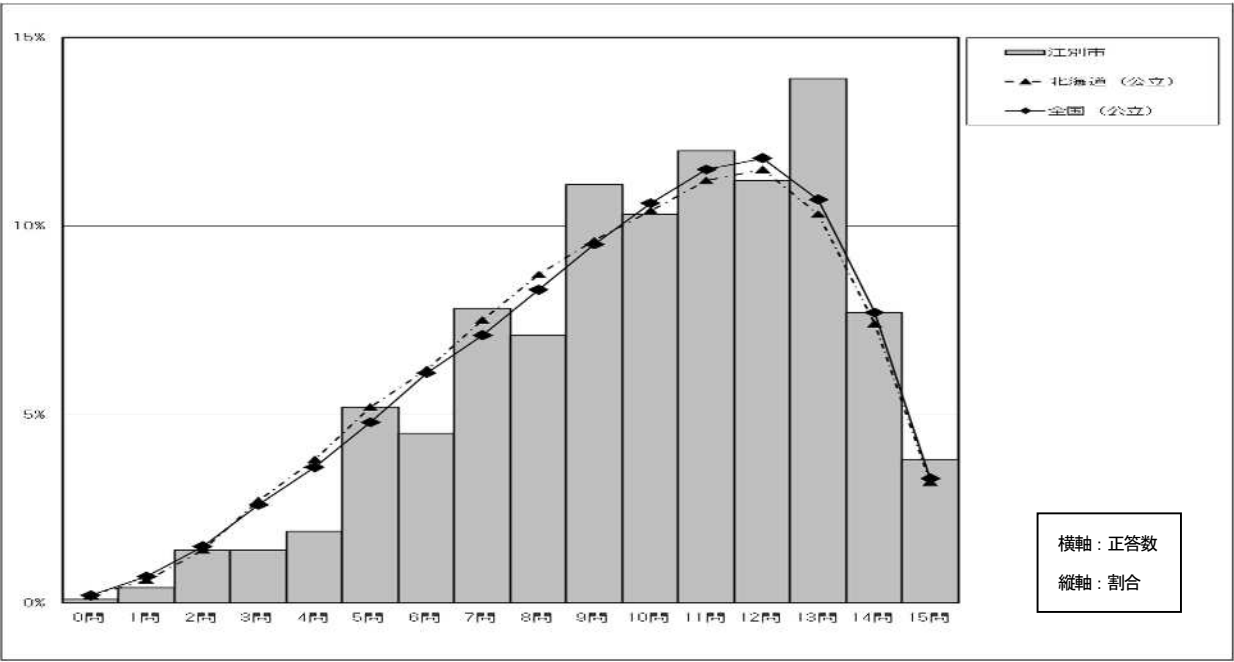
＜令和5年度からの領域別経年変化＞

○令和5年度と7年度は全ての領域で全国平均を上回っていましたが、令和8年度は「測定」以外の領域で全国平均を下回りました。

○4年間の経過を見ると「測定」以外の領域の全体的が右肩下がりになっています。

3 中学校 「国語」

＜正答数分布グラフ＞（横軸：正答数 縦軸：割合）



	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)
江別市	841	10.0 / 15	66.2
北海道（公立）	32,596	9.5 / 15	63.3
全国（公立）	841,873	9.6 / 15	63.9

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				江別市	北海道（公立）	全国（公立）
全体			15	66	63	63.9
学習指導 要領の 内容	知識及び 技能	(1) 言葉の特徴や使い方に 関する事項	5	66.2	61.9	63.0
		(2) 情報の扱い方に 関する事項	1	69.8	69.0	70.4
		(3) 我が国の言語文化に 関する事項	0			
	思考力、 判断力、 表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	65.2	63.1	63.9
		B 書くこと	3	71.9	68.2	67.4
		C 読むこと	3	61.2	59.0	59.7
評価の観点		知識・技能	6	66.8	63.1	64.2
		思考・判断・表現	9	66.1	63.4	63.7
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	9	75.2	71.8	72.7
		短答式	3	58.7	55.5	55.8
		記述式	3	47.7	45.5	45.5

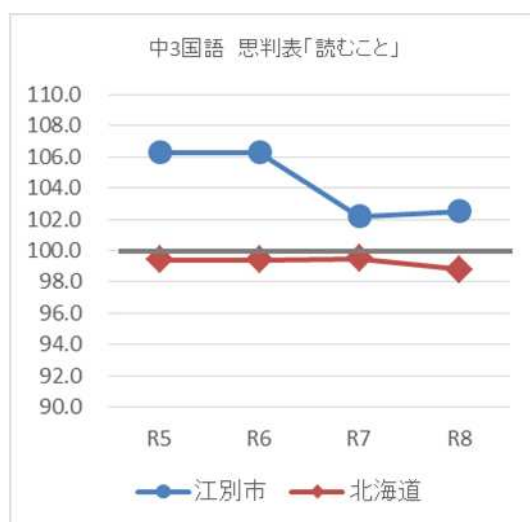
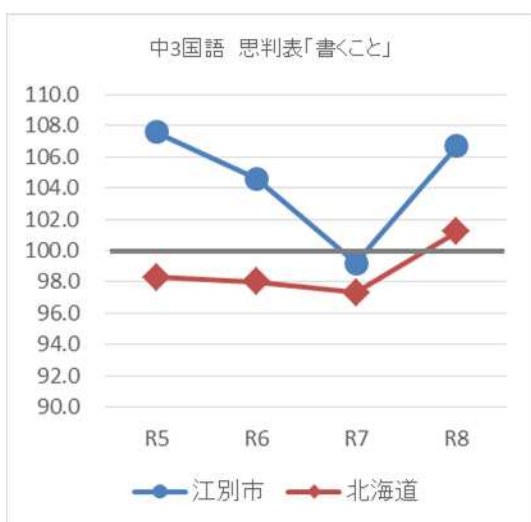
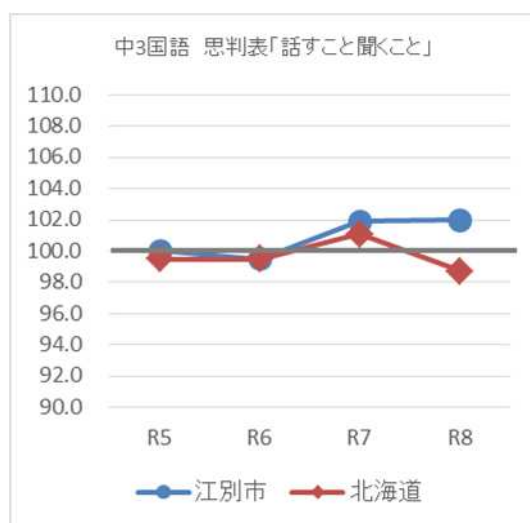
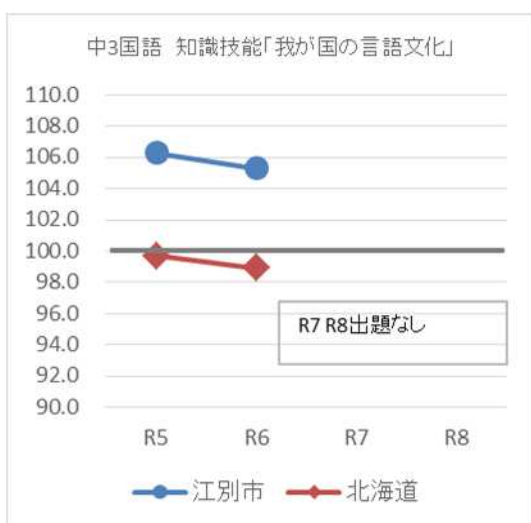
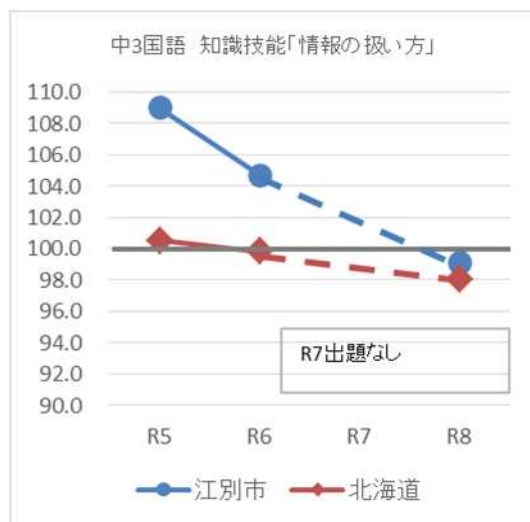
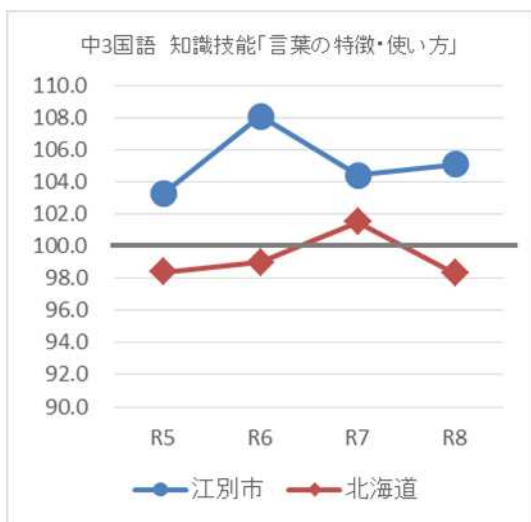
＜結 果＞

- 平均正答率は66.2%で、全国平均を2.3ポイント、全道平均を2.9ポイント上回っています。
- 学習指導要領の内容別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、「情報の扱い方に関する事項」以外の項目で全国平均を上回っていますが、全道平均は全ての項目で上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「互いの立場や考えを尊重しながら話し合い、結論を導くために考えをまとめることができる」
互いの立場や考えを尊重しながら話し合うためには、話し合いに参加している者が、それぞれの置かれた立場や意見が出された背景について理解しながら話したり聞いたりすることが大切です。
- 「情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことができる」
話し合いに含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話し合いの内容を正確に理解することにつながります。また、それぞれのもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが、話し合いを円滑に進めるために大切です。こうした情報の整理の仕方を理解し、実際の話合いの中で使うことができるようにすることが大切です。

【全国平均を100と見たときの領域別経年変化（中学校 国語）】

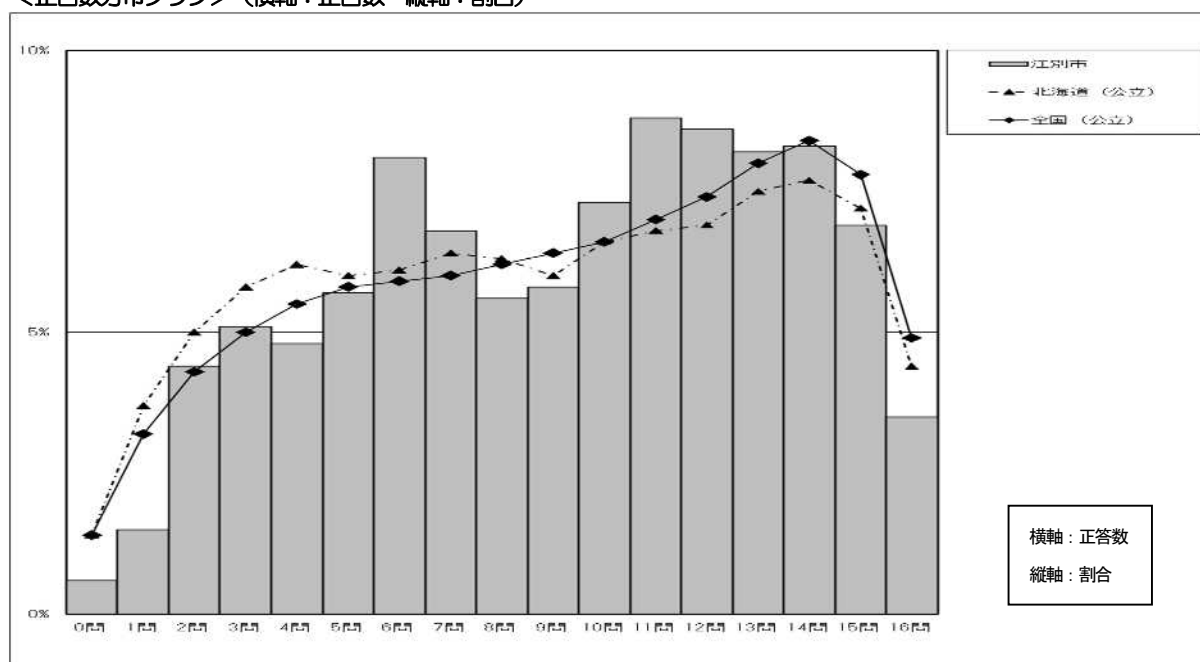


<令和5年度からの領域別経年変化>

- 多くの領域において全国平均を上回っています。
- 「情報の扱い方」は、年々右肩下がりになっています。
- 令和5年度の小学校6年の頃と比較するとどの領域も大きく下降することなく、特に「言葉の特徴・使い方」や「書くこと」は高い水準を維持しています。

4 中学校 「数学」

＜正答数分布グラフ＞（横軸：正答数 縦軸：割合）



	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)
江別市	840	9.2 / 16	57.8
北海道（公立）	32,580	8.8 / 16	55.0
全国（公立）	842,491	9.1 / 16	57.0

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			江別市	北海道（公立）	全国（公立）
全体		16	58	55	57.0
学習指導要領の 領域	A 数と式	5	68.8	66.2	67.8
	B 図形	4	52.5	47.9	48.7
	C 関数	3	52.3	50.7	54.8
	D データの活用	4	52.6	51.3	53.5
評価の観点	知識・技能	12	63.4	60.9	63.0
	思考・判断・表現	4	40.1	37.3	39.1
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	3	61.3	58.0	59.3
	短答式	9	64.1	61.8	64.2
	記述式	4	40.1	37.3	39.1

＜結果＞

- 平均正答率は57.8%で、全国平均を0.8ポイント、全道平均を2.8ポイント上回っています。
- 学習指導要領の領域別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、「関数」と「データの活用」以外は全国平均を上回り、全道平均は全ての項目で上回っています。

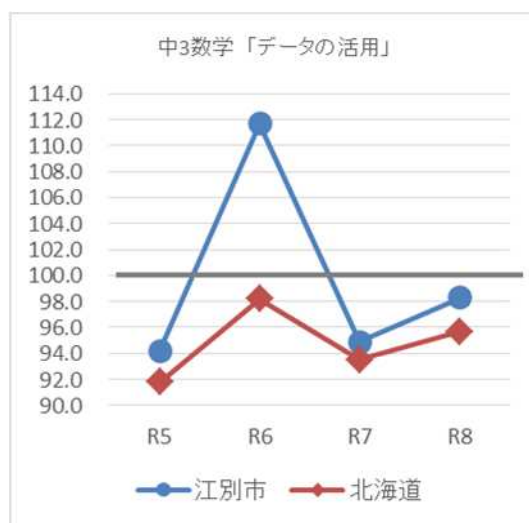
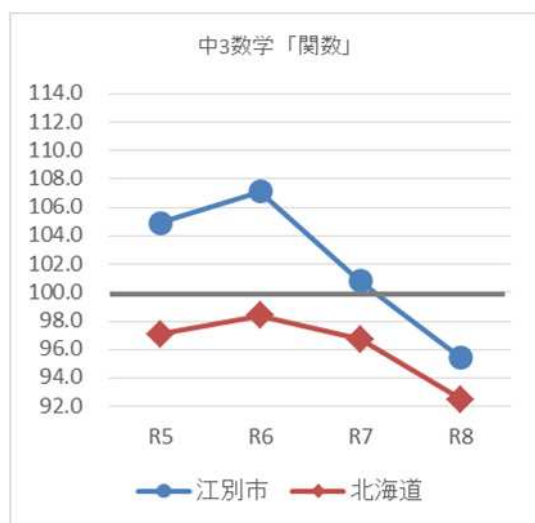
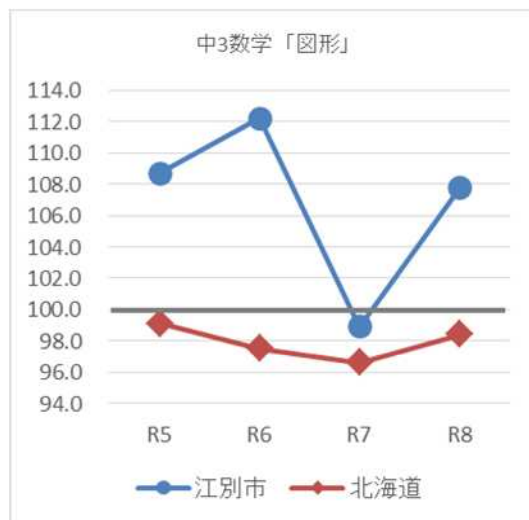
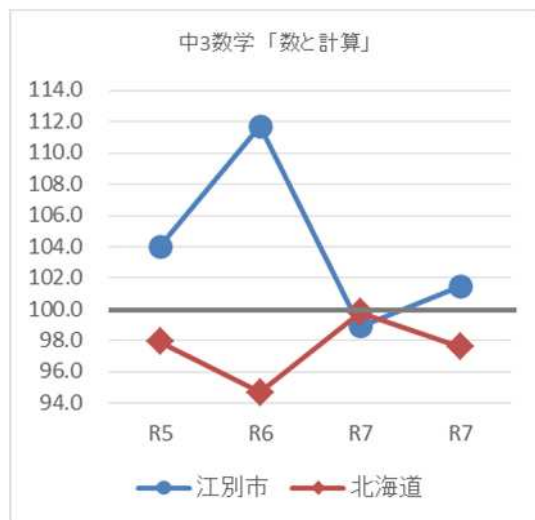
＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「関数を用いて事象を捉え考察する場面において、①数や式、表、グラフなどを活用して、数学的に処理すること、②反比例の関係を表す表の特徴を捉えて、 x の値に対応する y の値を求めることができる」
関数を用いて事象を捉え考察する場面では、具体的な事象の中から伴って変わる二つの数量を取り出して、その変化や対応の様子に着目して関数関係を見出し、その関数の特徴を調べるために、二つの数量関係を表、式、グラフで表現することが大切です。

- 「累積度数の意味を理解することができる」

日常生活や社会の事象を考察する場面では、表やグラフなどからデータの傾向を適切に読み取り、批判的に考察し判断することが求められる場合があります。その際、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することが大切です。

【全国平均を100と見たときの領域別経年変化（中学校 数学）】



<令和5年度からの領域別経年変化>

- 令和6年度は、どの領域も全国平均を上回る高い水準でしたが、「関数」と「データの活用」は令和7年度から8年度にかけて全国平均を下回っています。
- 「データの活用」は、令和6年度は高い水準でしたが、令和5年以降で苦手とする領域です。
- 令和8年度は、全体的にV字回復に見えますが、「関数」は右肩下がりになっています。

5 中学校 「英語」 (IRT による結果返却) ※公開問題の分析

※IRT とは、 国際的な学力調査 (PISA、TIMSS など) や英語資格・検定試験 (TOEIC・TOEFL など) で採用されているテスト理論です。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし (尺度) で比較できます。メリットとして以下の3点があげられています。

- ・調査日の複数設定が可能になる。各児童生徒が異なる問題を解く設計にできる。
- ・今まで以上に多くの問題を使用し、幅広い領域・内容等での調査が可能になる。
- ・学力の経年変化を各教育委員会・学校でも把握できる。

令和7年度は中学校理科で採用されました。

※問題構成について

- ・生徒1人あたり、公開問題10問と非公開問題12問を出題しています。
- ・公開問題には全員が同じように取り組む問題や一部共通の問題が含まれます。
- ・非公開問題は幅広い内容・難易度等から出題され、生徒ごとに異なる問題を解いています。

※IRT スコアとは、IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準とした得点で表すものです。

※IRT バンドとは、IRT スコアを1～5の5段階に区切ったものです。3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドとなります。

※非公開問題は、国や自治体等の状況を把握することを主目的とする出題です。このため、個々の問題の内容や正誤はフィードバックされませんが、IRT スコア・IRT バンドの算出に使用されます。

○以下は公開問題の分析です。

平均正答数集計値

	生徒数	平均正答数	標準偏差
江別市	782	4.3 / 9	2.4
北海道 (公立)	31,033	4.2 / 9	2.5
全国 (国公立) *	46,645	4.5 / 9	2.5

※全中学校が設問【1】【5】【6】【10】【11】【15】(1)【19】を実施。その他の設問を個々の生徒に割り当てられて実施。

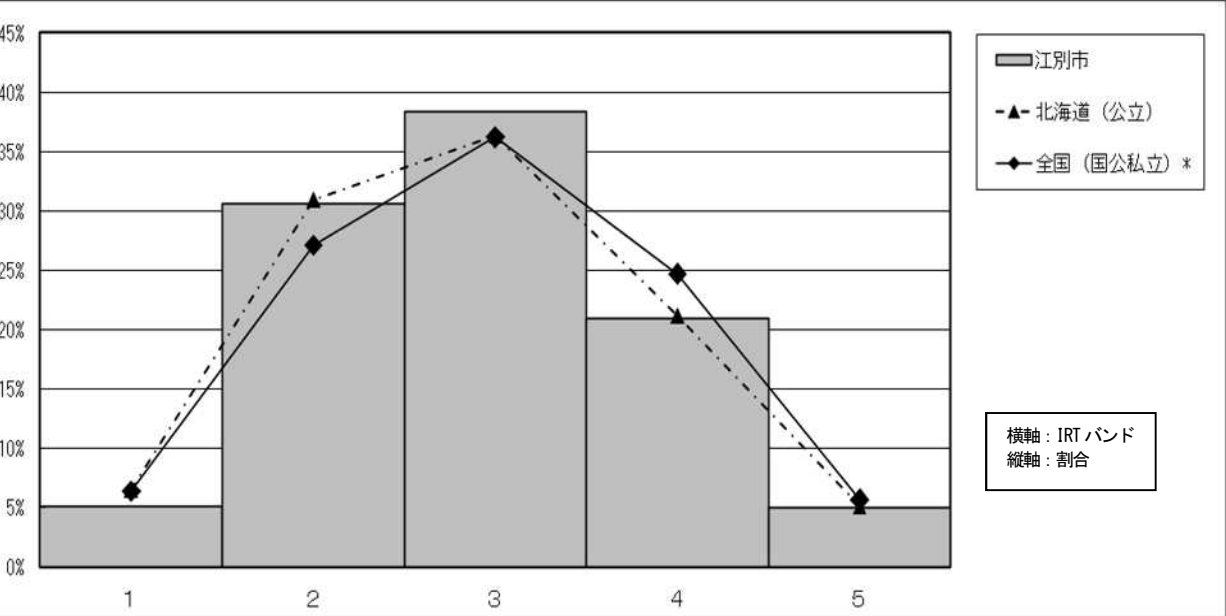
技能別平均正答数集計値

	聞くこと	読むこと・書くこと	話すこと
江別市	1.2 / 2	2.5 / 5	0.6 / 2
北海道 (公立)	1.2 / 2	2.4 / 5	0.6 / 2
全国 (国公立) *	1.2 / 2	2.6 / 5	0.7 / 2

IRTスコア集計値

	平均IRTスコア	標準偏差	パーセンタイル値				
			10%	25%	50%	75%	90%
江別市	493	104.8	368	425	490	561	622
北海道 (公立)	490	107.1	361	413	484	562	626
全国 (国公立) *	499	108.1	363	422	498	575	636

IRT バンド分布グラフ



<結 果>

- 平均 IRT スコアは 493 で、全国を 6 ポイント下回り、全道を 3 ポイント上回っています。
- 公開問題別集計結果からは、学習指導要領の領域の「聞くこと」では、評価の観点における「知識・技能」「思考・判断・表現」で全国平均を上回りました。「読むこと」及び「書くこと」では、「思考・判断・表現」において全国平均を下回り、「話すこと」では、「知識・技能」において全国平均を下回りました。
- 「話すこと」領域において、無回答率が全国よりも高くなっています。

<公開問題において正答率の低い設問及び学習指導の改善点>

■「日常的な話題について、目的に応じて、必要な情報を読み取ることができる」

「必要な情報を読み取る」とは、複数の情報が含まれるまとまりのある内容を読み、書かれていることの全てではなく、読み手として目的に応じて知りたいことや欲しい情報などを読み取ることです。そのためには、書かれていることの全てを読み取ろうとするのではなく、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて必要な情報を読み取ったり、自分の置かれた状況などから何が自分にとって必要な情報であるのかを判断した上で読み取ったりすることが大切です。

■「日常的な話題について、短い文章を読み、概要を捉えることができる」

「概要を捉える」とは、物語文や説明文などのまとまりのある文章を最初から最後まで読み、一語一語や一文一文の意味など特定の部分にのみとられることなく、登場人物の行動や心情の変化、全体のあらすじ、書き手が述べていることの大まかな内容などを捉えることです。物語の概要を捉える際には、物語全体の時間の流れや場所などの場面に沿って、登場人物の行動や出来事と、その時の心情に着目して文章を読むことが大切です。また、説明文の概要を捉える際には、段落ごとに、その話題と主な内容を把握し、それらを段落間の関係に沿ってつなぐことが大切です。

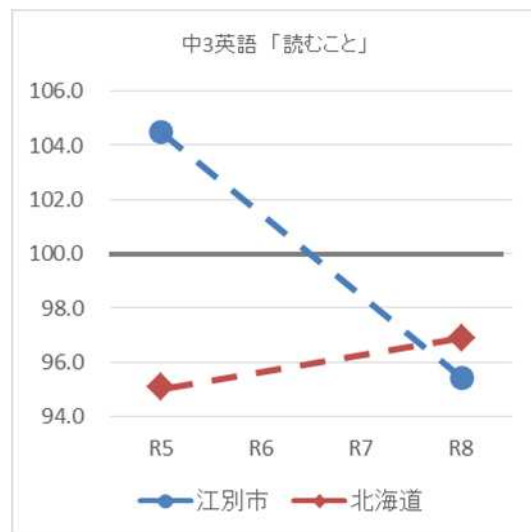
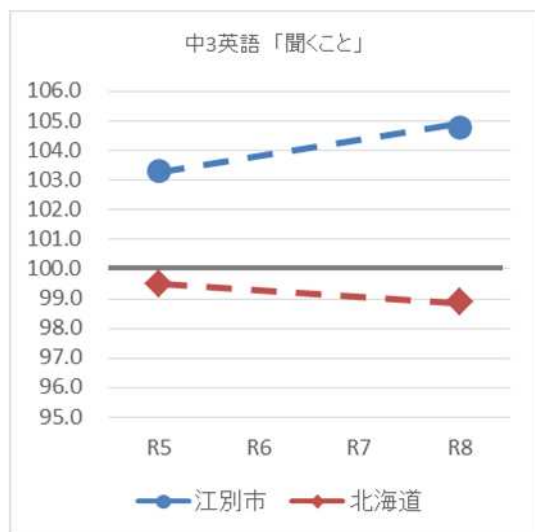
■「『相手の行動を促す』という言語の働きなどの知識を、話すことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができる」

「話すこと」の目標である、即興で伝え合ったり、まとまりのある内容を話したり、聞いたことや読んだことについて話したりするためには、音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、話すことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けておくことが重要です。そのためには、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを意識して活動を行い、英語の音声や語彙、表現、文法の知識を話すことにおける実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図るとともに、言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うことが大切です。

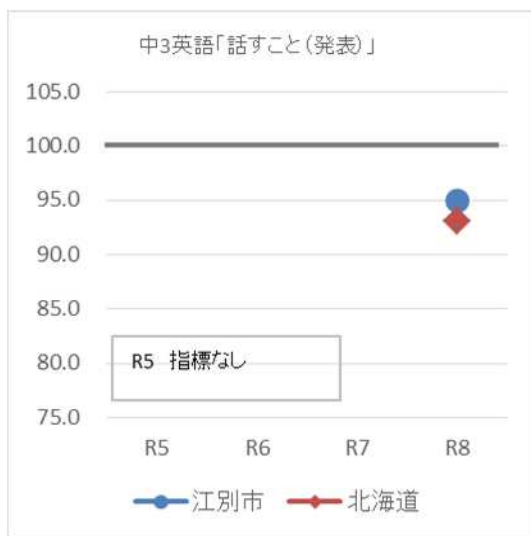
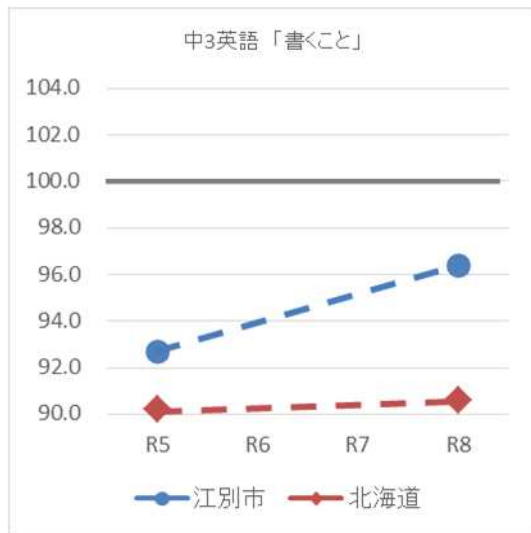
■「話すこと」

単語や文法を知っていても「どう答えればよいかわからない。」、「文法的に間違えてはいけない。」、「完璧に話さなければいけない。」という意識が強いと途中の段階でも英語で話すことを諦めてしまい、無回答になったとも考えられます。日常の授業で「正解か完璧か」よりも「知っている単語で伝えようとする姿勢」を評価したり、オールイングリッシュの授業を推進したりするなど、日常生活の中において意図的に英語で話してみる機会を増やすなど改善が必要です。

【全国平均を 100 と見たときの領域別経年変化（中学校 英語 4 技能）】



※R6・R7 は試験なし



R6・R7は試験なし

＜令和5年度からの領域別経年変化＞

- 「聞くこと」は、令和5年度も8年度も全国平均を上回りましたが、「読むこと」と「書くこと」は全国平均を下回っています。
- 「読むこと」は、令和5年度から8年度にかけて大きく下降しています。
- 「書くこと」は、全国平均を下回っていますが、令和5年度から上昇傾向にあります。
- 「話すこと」は、（やりとり）（発表）ともに全国平均を下回っています

IV 質問調査の結果

1 「児童・生徒質問」

(1) 生活習慣

① 朝食を「毎日食べている」、「どちらかといえば毎日食べている」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	91.8	92.7	-1.5	-1.0
中学校3年	91.7	91.0	0.8	-0.2

② 「毎日同じくらいの時刻に寝ている」、「どちらかといえば同じくらいの時刻に寝ている」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	81.9	80.6	-0.9	-1.3
中学校3年	79.9	80.4	-0.6	-0.6

③ 平日、1日当たり「1時間以上SNSや動画視聴をしている」

	令和8年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和8年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	84.7	53.4	-6.2	2.3
中学校3年	92.7	77.1	-0.9	-2.1

朝食摂取については、小学校6年は全国平均を1.5ポイント下回り、昨年度よりやや下降しています。中学校3年は改善が見られ、全国平均を0.8ポイント上回りました。

就寝時刻については、小学校6年、中学校3年ともに全国平均を下回りましたが、小学校6年は昨年度よりやや改善しています。中学校3年生では昨年度の全国比とほぼ同じ結果となりました。

朝食の摂取は決まった睡眠時間や起床時刻に強く連動していることが推測されます。生活リズムの乱れが朝食の欠食につながり、授業への集中力や運動のキレ、心のゆとりがなくなるなど朝食の摂取は学校へ行きたいという気持ちと大きく関連があります。

規則正しい生活習慣を身に付けるために、子ども自身が自分の生活を振り返り、スモールステップで継続できる「自分で自分の生活をコントロールできた」という小さな自信（自己効力感）を感じさせるような取組をさらに充実させる必要があります。

家庭でのSNSや動画視聴時間は、前回調査の令和6年度から大幅に増加しており、スマホ・ゲームとの付き合い方の見直しが喫緊の課題です。今年度は、児童生徒によるスマート4ルールの見直し作業を行っており、児童生徒本人、保護者（家庭）、学校が連携して、SNS・インターネットとの向き合い方を考え、改善する必要があります。

(2) 学習習慣

① 分からないことや知りたいことがあった時、自分で学び方を考え、「工夫している」、「どちらかといえば、している」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	79.7	81.0	0.3	-0.7
中学校3年	80.6	76.9	2.4	-0.6

② 平日に、学校の授業以外に1時間以上勉強する(学習塾、家庭教師、インターネットでの学習の時間も含む)

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	53.2	63.7	3.3	9.7
中学校3年	55.8	56.8	-5.8	-4.8

③ 休日に、1時間以上勉強する(学習塾、家庭教師、インターネットでの学習の時間も含む)

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	41.0	57.4	2.0	10.3
中学校3年	51.6	58.4	-0.9	0.5

上記3項目について、①の中学校3年「分からないことや知りたいことがあった時、自分で学び方を考え、工夫している、またはどちらかといえばしている」以外の全ての項目で昨年度より下回っています。特に中学校3年生の「平日に、学校の授業以外に1時間以上勉強する」割合は昨年度と同様に全国平均を下回り、全国比でも差が開いています。家庭学習の時間は、平日も休日も年々全国比が下降傾向にあることは大きな課題と言えます。

家庭でのゲームや動画視聴は長時間になる傾向が見られることから、「スマホ・ゲームとの付き合い方の見直し」と「短時間でも達成感が得られる環境づくり」を学校と家庭が連携して進めていく必要があります。また、今年度は児童生徒によるスマート4ルールの見直しを行うことから、家庭での学習に対する取り組み方を振り返り、子ども自らが改善しようという意欲付けも必要です。

家庭でのSNSや動画視聴時間が長時間化しており、児童生徒本人の意識付け、学校と家庭との連携による働きかけなどを通じて、短時間でも学習の達成感が得られる環境づくりなど、家庭での学習に対する取組を振り返り、子ども自らが改善しようという意欲付けが必要です。

(3) 自己肯定感

① 自分には、よいところが「あると思う」、「どちらかといえばあると思う」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	87.4	86.6	1.8	-0.3
中学校3年	84.5	81.8	0.5	-4.4

② 先生はあなたの良いところを認めてくれていると思う

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	93.2	92.2	1.8	0.0
中学校3年	90.1	89.5	-0.8	-2.7

③ 将来の夢や目標を「もっている」、「どちらかといえば、もっている」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	81.7	81.0	-0.1	-2.1
中学校3年	68.0	65.1	0.4	-2.4

自己肯定感に関する3項目は全てにおいて昨年度よりも肯定的な回答が増え、全国比も上昇傾向にあります。

江別市は、子どもが主役のまち宣言を行い、学校教育でも子どもが主役の学校づくりを進めています。教育活動の中心である授業でも子どもが主体的に学ぶ取組を行っています。特に対話のある授業づくりは、自分の意見やアイデアがグループやクラスで採用されたり、議論に貢献したりする経験を通して、「自分の考えには価値がある」と実感でき、授業の中での存在感につながります。また、児童会や生徒会活動でも子どもたち自身に企画・運営を任せる場面が意図的に設けられ、その中で責任を持って役割をやり遂げ、先生や同級生から「ありがとう」「すごかったね」と承認されることで、「自分は誰かの役に立っている」という自己有用感が高まります。小中一貫教育の部活動体験や合同体力テストなどが、自己肯定感につながっていることも子どもたちのアンケートからも示され、特に中学生の気持ちの高まりがうかがえます。

「間違えても大丈夫」「自分のままでいられる」と思える教室の雰囲気づくりは、子どもの安心感につながることから、子どもにとっての安全安心な居場所となる学校づくりを今後も継続していきます。

(4) 主体的・対話的で深い学びの視点による学習への取組

① 学級で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気づいたりすることができている「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	88.0	86.7	2.3	1.8
中学校3年	90.7	82.8	3.7	-1.9

② 授業で課題の解決に向けて、自ら考え、自分から「取り組んでいる」、「どちらかといえば、取り組んでいる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	82.2	79.0	4.6	-1.3
中学校3年	80.7	78.2	1.9	0.5

③ 授業で自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てを「工夫して発表している」、「どちらかといえば、工夫して発表している」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	66.5	69.2	0.1	0.6
中学校3年	64.4	57.2	-1.1	-5.8

主体的・対話的で深い学びの視点による学習への取組に関する3項目のうち、小学校6年の「授業で自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てを工夫して発表している、どちらかといえば工夫して発表している」以外は昨年度を上回りました。

小中学校の校内研究は、児童生徒が自ら課題を見つけ、解決に向け意欲的に取り組むための「めあて」や「振り返り」の設定など、主体性を引き出す指導の改善や対話し合う場面を意識的に設定し、多様な意見に触れさせる授業づくりを進めています。これらの取組によって昨年度よりも高い数値に表れたと言えます。一方、「授業で自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てを工夫して発表している、どちらかといえば工夫して発表している」項目は小学校では下降し、中学校では依然として全国平均を下回っています。

単に話し合わせるだけでなく、自分の考えを分かりやすく相手に伝えるための「話の組み立て（構成）」や「資料（図・グラフ・ICTスライドなど）の使い方」を具体的に学ぶ場を授業内に設定すること、また、どのような発表が良い発表なのか（根拠が明確か、資料が効果的かなど）を示す「評価基準」を活用し、児童生徒同士で相互評価させるなどの取り組みが必要です。

小中一貫教育の系統的指導のさらなる充実として、小学校段階から工夫して発表する経験を積み重ねられるよう、小・中学校間での指導内容の共有や発達段階に応じたアプローチの継続が必要です。

(5) 社会に対する興味・関心

① 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う。「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	82.9	84.5	2.8	3.2
中学校3年	73.8	74.8	1.5	-0.5

「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」割合は、小学校6年は昨年度の全国平均よりも下降しましたが、小中学校とも全国平均を上回りました。

江別市の各校には多くの学習ボランティアが学校教育に積極的に関わっている環境があります。子どもたちが「地域に支えられている」と実感すると同時に、「自分も地域の一員である」という当事者意識が育まれていると言えます。

今後も地域を題材にした探究学習や地域行事の情報を校内で可視化するなど、積極的に地域の情報に触れさせたり、地域行事に参加したりすること等を通して、自分の住んでいる地域に関心を持たせ、社会に開かれた教育課程の実現を図っていく必要があります。

(6) 思いやり

① 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	91.9	88.3	10.8	6.9
中学校3年	86.1	86.3	9.8	9.2

② 人が困っているとき進んで助けている。「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	93.6	92.5	0.9	-1.2
中学校3年	91.1	92.2	0.3	1.3

③ 人の役に立つ人間になりたい「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	95.5	96.5	-0.3	0.1
中学校3年	96.7	95.7	0.8	-0.9

「いじめは、どんな理由があってもいけないと思う」「人が困っているとき進んで助ける」割合は、小学校6年、中学校3年ともに全国平均を上回りました。「人の役に立つ人間になりたい」割合は、中学校3年は全国平均を上回りましたが、小学校6年は下回りました。

今後も各学校で実施されているいじめ根絶に向けたアンケートや児童生徒主体の集会活動等を継続し、いじめを許さない環境づくりをするとともに、早期発見・早期解決のため、いじめの積極的認知を進めていく必要があります。

また、いじめはいけないことと思わない児童生徒が小中学校で存在することから、対象の児童生徒がなぜ思わないかを探るとともに個別の指導を行うなど、根本的な取組が必要です。

いじめはいつでもどこでも起きることを念頭に、いじめ基本方針に則り、初期対応、組織的対応を迅速に行い、また、人への思いやりや規範意識を育むため、特別の教科道徳を中心に、学校の教育活動全体で道徳教育を推進していくことが大切です。今後も「いじめ見逃し0」とともに「いじめは、どんな理由があってもいけないと思う」割合100%を目指します。

(7) ICT機器の活用

① 学校の授業で、PCやタブレットなどのICT機器を「週3回以上使用した」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	74.6	76.5	5.8	4.8
中学校3年	89.7	93.9	11.8	17.4

② PC・タブレットなどのICT機器で文章を「作成する(文字、コメントを書くなど)ことができる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	82.8	83.8	3.7	2.0
中学校3年	88.3	87.1	3.5	3.5

③ インターネットを使って情報を「収集する(検索する、調べるなど)ことができる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	84.4	91.2	-0.5	1.4
中学校3年	91.6	90.9	0.7	-0.6

④ PC・タブレットなどのICT機器を使って情報を「整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	72.5	68.9	3.0	-0.4
中学校3年	72.6	65.3	3.2	2.0

⑤ PC・タブレットなどのICT機器を使って学校のプレゼンテーション(発表のスライド)を「作成することができる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	83.2	84.4	8.6	7.7
中学校3年	87.9	83.5	7.9	6.9

インターネットを使って情報を「収集する(検索する、調べるなど)ことができる」項目の小学校以外は全て全国平均を上回りました。江別市では「プレゼンテーションを作成することができる」割合が、昨年度に引き続き小学校・中学校とも全国を大きく上回っているなど、ICT機器の活用が進むことで児童生徒のスキルが上がってきています。

ICT機器の活用については今後も工夫はなされるべきですが、あくまでも手段であり、学習のねらいに迫るために単元指導計画の中で活用することや、有効と判断できるときに活用したり、学習のねらいに沿って従来通りのデジタル機器を使わない活動も行うことも時と場合によっては必要です。

2 「学校質問」

(1) 学習規律

① 調査対象学年について、授業中の私語が少なく、落ち着いていると「思う」「どちらかといえば思う」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	16.1	14.1
中学校3年	87.5	100.0	-3.2	8.0

「授業中の私語が少なく、落ち着いている」割合は、小学校6年が4年連続100%で全国平均を大きく上回り、江別市の小学校は非常に落ち着いた状態にあると言えます。中学校は、昨年度まで5年連続100%でしたが、今年度は全国平均を下回りました。

各中学校区において、一貫した指導として小中共通の学習や生活に関するスタンダードが確立されており、全ての学校で姿勢や態度、聞き方や話し方、授業開始のチャイムを守るなどの学習規律が丁寧に指導されています。

(2) 家庭学習

① 調査対象学年について、家庭学習の取組として、家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えた(教科共通)「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	3.4	3.4
中学校3年	100.0	100.0	8.8	7.2

家庭学習の取組として、「家庭での学習方法等を、具体例を挙げながら教えた」割合は、小学校6年、中学校3年ともに4年連続で100%となりました。

江別市の各小中学校では、学習内容を確実に定着させるために、家庭と連携を図りながら学習方法を具体的に指導し、家庭における学習の習慣化を図る取組が推進されています。

(3) キャリア教育

① 前年度までに、学校では、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をした

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	94.1	94.1	12.1	8.0
中学校	100.0	100.0	2.5	1.6

「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をした」割合は、小学校では全国平均を大きく上回り、中学校では2年連続で100%でした。それに対して「将来の夢や目標をもっている」児童生徒の割合は、全国平均と変わらず、昨年度の全国平均より上向きです。江別市の各小中学校では、キャリアパスポートの取組や職場体験、進路指導を推進してきた成果が出てきていますが、さらなる工夫が必要です。

(4) 主体的・対話的で深い学びの視点による学習への取組

① 前年度までに、授業において、児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を「よく行った」「どちらかといえば行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	94.1	88.2	4.6	-1.7
中学校	100.0	100.0	14.6	13.9

② 前年度までに、学習指導において、児童が、それぞれのよさを生かしながら、他者と情報交換して話し合ったり、異なる視点から考えたり、協力し合ったりできるように学習課題や活動の工夫を「よく行った」「どちらかといえば行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	4.8	4.7
中学校3年	100.0	100.0	5.4	5.0

③ 前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫を「よく行った」「どちらかといえば行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	100.0	94.1	11.9	5.5
中学校3年	100.0	100.0	13.9	13.2

- ④ 前年度までに、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けることを「よく行った」「どちらかといえば行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	13.0	13.1
中学校3年	100.0	100.0	20.1	19.7

児童生徒質問調査の「主体的・対話的で深い学びの視点による学習への取組」では、多くの項目で全国平均を上回りましたが、指導面では小中学校とも100%の取組が多く、全国平均を上回っています。

江別市の多くの小中学校では校内研究を通して、対話を重視した授業づくりを全ての授業者が意識し、子どもが主役の授業づくりをすることで単元のねらいに迫れるよう授業改善を推進しています。授業者も児童生徒が自ら課題を解決したり、工夫した発言や発表を行ったり、相手にしっかり伝えるなど授業改善の効果を実感しています。

(5) ICT機器を活用した授業

- ① 調査対象学年について、児童生徒が、一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業で「週3回以上」活用した

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	4.6	3.4
中学校3年	100.0	100.0	6.4	5.5

- ② 調査対象学年について、児童生徒が自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を「週3回以上」使用させた

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	100.0	82.4	48.1	30.2
中学校	75.0	75.0	27.1	22.7

- ③ 調査対象学年について、児童生徒同士がやりとりする場面では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を「週3回以上」使用させた

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	88.2	76.5	45.7	30.2
中学校	62.5	50.0	26.4	10.6

- ④ ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を「よく行った」「どちらかといえば行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	100.0		13.7	
中学校	87.5		4.2	

タブレット端末を活用した授業に関する項目は、令和7年度よりも着実に上昇し、全国平均を上回っていることから日常的な活用が定着しています。考えをまとめ、発表・表現する場面での活用、児童生徒同士の協働学習における活用の広がり、教科の学びを深める指導の実践も授業改善に取り組む学校の工夫となっています。

江別市では、小中学校ともに「端末を授業で日常的に使う（週3回以上）」基盤は構築されています。特に小学校では、発表や表現、意見交換といった主体的・協働的な学習場面での活用が非常に高いレベルで実践されています。

今後は、中学校において単なる閲覧や利用を超えた「発表・表現」や「生徒同士の対話・協働」の場面でのICT活用を増やし、学びの質を高めていくなどのさらなる授業改善が必要です。

(6) 特別な配慮が必要な児童生徒への指導

- ① 前年度までに、調査対象である児童生徒に対する授業の中で、発達障害を含む障害のある児童生徒も含めた、多様な児童生徒が通常の学級に在籍していることを前提に、学級全体での指導の工夫を「十分に行った」「一部行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	100.0	100.0	1.2	2.6
中学校	100.0	100.0	1.2	3.1

2年連続で小中学校ともに100%となり、特別な支援を必要とする児童生徒を含む「多様な児童生徒が共に学ぶ」という前提に立った指導工夫が特定の学校や学級にとどまらず、市内の全ての小中学校で実践されています。また、「十分に行った」割合は小学校で82.4%、中学校で87.5%となっており、全国平均を20%以上上回っています。各校ではユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりや個別最適な支援など、具体的な指導の工夫が組織的に行われています。全ての学校は、高い実践率を維持・展開しつつ、支援を受けた児童生徒自身がどう学びを深められているかという「質の検証」を進めていく必要があります。

(7) 学校運営

- ① 児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルの確立を、「よく行った」「どちらかといえばよく行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	100.0	100.0	2.7	2.9
中学校	100.0	100.0	4.1	4.0

「教育課程を編成・実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルの確立を行っている」割合は、小学校、中学校ともに、4年連続100%となりました。

江別市の小中学校では、全国学力・学習状況調査や江別市学力調査(NRT)等の結果を分析し、児童生徒の実態に合った教育課程を編成しており、「計画(Plan)－実行(Do)－評価(Check)－改善(Action)」の一連のサイクルによって学校改善及び授業改善を図る取組を継続して行っています。

(8) 組織としての学校

- ① 前年度に、教員が授業で問題を抱えている場合、率先してそのことについて「週に1回またはそれ以上」「月に数回程度」話し合うことを行った

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	88.2	94.1	8.7	15.0
中学校	87.5	62.5	22.3	-2.4

- ② 前年度に、教員が学級の問題を抱えている場合、「週に1回またはそれ以上」「月に数回程度」とともに問題解決に当たることを行った

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校6年	88.2	94.1	-1.2	5.6
中学校3年	100.0	87.5	21.0	9.5

教員が「授業」や「学級」で問題を抱えている場合、「週に1回またはそれ以上」「月に数回程度」とともに話し合ったり、問題解決に当たったりした割合は、「授業」では小中学校ともに、「学級」では中学校が全国平均を大きく上回っています。

江別市ではいじめの問題をはじめとする生徒指導だけでなく、学年学級経営や授業づくりにもいわゆる個業ではなく組織であたるよう各小中学校に呼びかけています。「授業」においては問題を抱えていなかった小学校がありましたが、いつでも教員が気軽に話ができる職場づくりをこれからも推進していきます。

(9) 全国学力・学習状況調査の活用

- ① 令和7年度の全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するための活用を「よく行った」「行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	100.0	100.0	3.3	3.5
中学校	100.0	100.0	6.4	6.0

「全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用した」割合は、小学校、中学校ともに5年連続100%となり全国平均を上回っています。

江別市の小中学校では、全国学力・学習状況調査結果や北海道チャレンジテストなど全国・全道規模の学力調査だけでなく、江別市の小中学校で実施の標準学力検査（NRT）や各校で日常的に行っている学習の状況を細かく分析し、次年度の教育課程に反映させるとともに、学校が一つのチームとして学力向上の取組を継続して行っています。

(10) 小学校教育と中学校教育の連携

- ① 前年度までに、近隣等の小学校・中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を「よく行った」「どちらかといえば行った」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	100.0	100.0	33.0	34.7
中学校	100.0	100.0	28.0	28.3

「前年度までに、近隣等の中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を行った」割合は、小学校、中学校ともに3年連続で100%となり、全国平均を大きく上回っています。

江別市では、令和5年度から市内全域で実施された小中一貫教育により、各中学校区での調査結果の交流を計画的に行っています。その中で、学力における共通課題等を明確にし、子どもたち一人一人の学力の向上に向けて「系統的な指導」を進めています。また、相乗的・補完的指導として、小学校6年の中学校体験（授業や部活動）、小中合同の体力テスト、夏季休業中の小学校学習会への中学生のサポート、児童会生徒会合同の挨拶運動など、児童の学力定着・向上や部活動への参加意欲や中学生の主体性や自己肯定感・自己有用感を醸成する取り組みを行っています。

(11) 家庭や地域との連携

- ① コミュニティスクール等の取組によって、学校と地域、保護者の相互関係が深まった「そう思う」「どちらかといえばそう思う」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	100.0	100.0	10.9	6.7
中学校	100.0	100.0	15.6	11.0

- ② コミュニティ・スクール等の取組は、学校教育活動の充実や学校課題の解決だけではなく、地域及び家庭の課題解決や地域活動の担い手育成に貢献している「そう思う」「どちらかといえばそう思う」

	令和8年度結果(%)	令和7年度結果(%)	令和8年度全国比	令和7年度全国比
小学校	100.0		13.8	
中学校	100.0		18.1	

「コミュニティ・スクール等の取組によって、学校と地域、保護者の相互関係が深まった」割合は、小学校、中学校ともに100%となり（中学校は3年連続）、全国平均を大きく上回りました。また、コミュニティ・スクールの学校運営委員会では、中学校区内の小中学校合同で委員会が開かれ、小中一貫教育の取組だけでなく中学校区の家庭や地域に関わる共通した課題や解決の具体策について協議を行っています。

今年度は、多くの学校で家庭でのスマホの使用時間と家庭学習の時間の関係性を話題にし、子どもたちが自分事として考え行動する取組を進めたり、地域の防災に関わる取組を避難所になる学校を中心とした防災学習として計画していたりする学校があります。今後も学校と地域がともに児童生徒の育成のためにコミュニティ・スクールでの熟議と実践を継続して進めます。

参考引用文献

令和8年度 全国学力・学習状況調査 解説資料（国立教育政策研究所教育課程研究センター）